

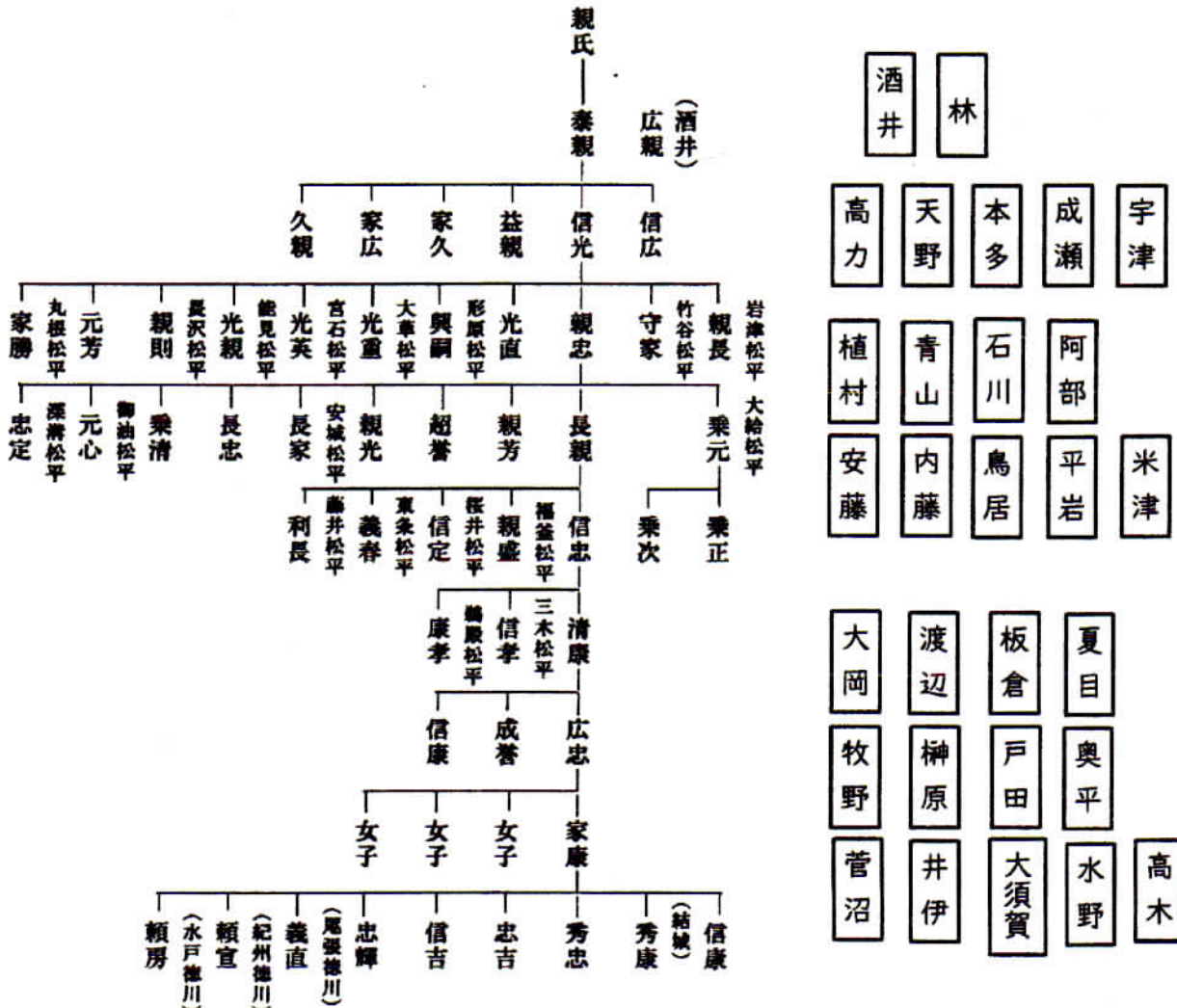
「家康公を支えた主な三河譜代たち」
 ~三河から全国へ、譜代家臣たちの足跡~

1 はじめに

(1) 三河守護の変遷と幕府奉公衆の動き—松平氏が勢力を拡大した契機

三河守護名	主な出来事
高師兼 1337~1351	足利將軍家の奉公衆(直屬の武士)。館を菅生郷に構えていた。 足利直義(尊氏弟)と執事である高師直の対立(觀応の擾乱)により高一族は滅亡。
仁木義長 1351~1360	尊氏の信任が厚い仁木氏が守護職に。伊勢・伊賀・志摩・三河・遠江の守護職を兼任する。尊氏死後は排斥する動きが高まり伊勢国に逃亡、権勢を失う。子孫が榊原姓を名乗り三河国に移った。
新田(大島)義高 1360~1379	関東の新田一族である新田大島義高が守護に抜擢された。この在任期間に松平郷に高月院が再建され、 南北朝の争乱で新田義貞に従っていた宇都宮氏が上和田に入った。宇都宮氏は大久保氏の源流(諸説あり)。
一色氏 1379~1440	在任中に南北朝の合一がなされる。足利義満による全盛期を迎える。天恩寺の建立など市域の仏殿建立が見られる。
細川氏 1440~1478	守護代である西郷氏が竜頭山に砦を築く(現在の岡崎城)。 吉良氏の被官衆や、不満を持つ地元の奉公衆によって一揆が起こる。西郷氏に代わり松平信光が鎮座、西三河一円に勢力を拡大する。 応仁の乱の勃発後に起きた井田野の合戦では松平親忠が一族を結集して加茂の豪族に勝利する。伊賀八幡宮、大樹寺の建立。

(2) 「三河譜代」の登場と発展—松平氏被官としての主な三河譜代衆の形成—南北朝の争乱がポイント



2 徳川創業期の譜代家臣たち

(1) 一向一揆後の家臣団

再編「三備の軍制」

- ・東西三河旗頭を中心に、命令系統を整備。松平一門衆などの内紛を防ぐ。
- ・「旗本先手役」の創設。一人に50騎ほどの与力。自由に動く機動部隊。「旗本」のルーツ。後には大久保忠佐や井伊直政も加わる。徳川創業期の功臣たちが顔を並べる。

(2) 内政の充実 三奉行

「仏高力、鬼作左、どちへんなし（偏らない）の天野三兵」

(3) 問題点

- ・嫡子信康（岡崎城主）の位置が明確でない
- 一後の「信康事件」の構造的な原因。東西旗頭を超えて、国衆や家臣たちを岡崎城に出仕させた。
- 信康退去後の岡崎城代は本多重次（家忠日記より）

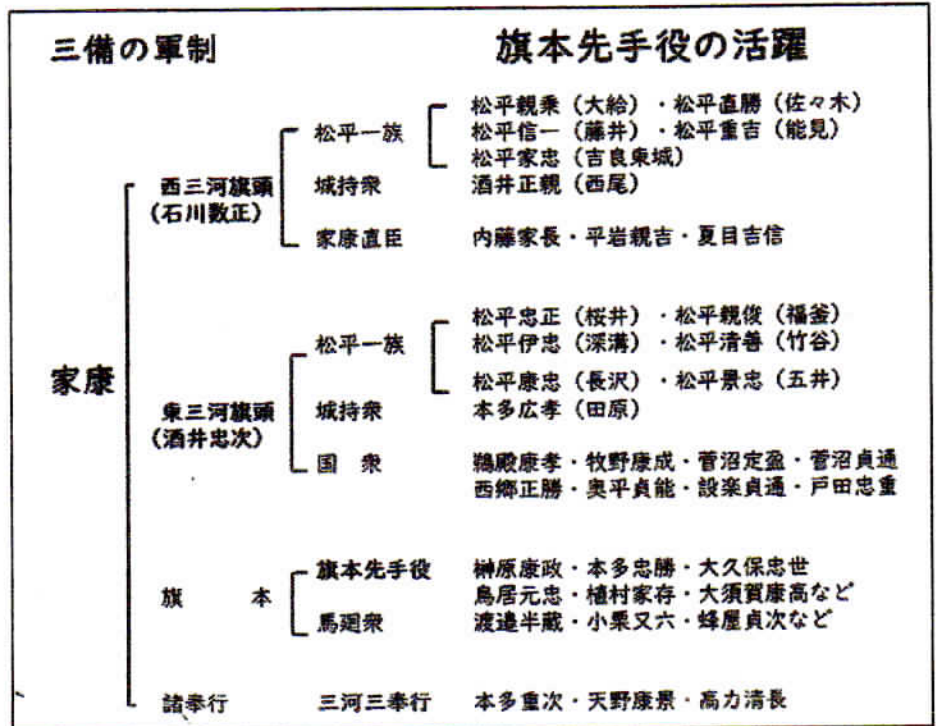
3 徳川十六将図に象徴される譜代家臣の武功中心的な扱い—本多重次がないのはなぜか

(1) どの様な武士たちか—

- ・徳川家の創業期から武功を挙げた武士たち。官僚による治世に特に顕彰された。
- ・後に追加され、総勢28名の三河武士たちが顕彰される。

(2) この三河武士は？

- ・松平康忠
長澤松平家当主。母は碓井姫で酒井忠次は義父、家康の従弟にあたる。天文15年生まれで、家康公の六男忠輝が名跡を継ぐが、改易により嫡流は途絶えた。康忠の系統は後世に繋がれる。
- ・米津常春
米津氏はもともとは駿河地方の出自とされるが、諸説があって明らかではない。碧海郡の米津に住したことから米津氏を名乗るようになったと伝わる。南北朝の影響を受けたとすれば、安城譜代と考えてもよい。常春は家康公の父と同年代であり、安城城の攻略では織田信広を捕縛する功を挙げた。東三河の平定戦までは登場するが以後の記録はない。

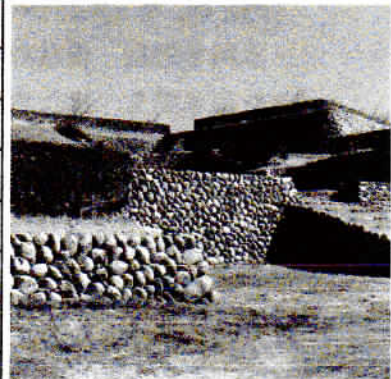


4 関東移封後の知行地(主な三河譜代関係分) — 関東移封時に冷遇された本多次

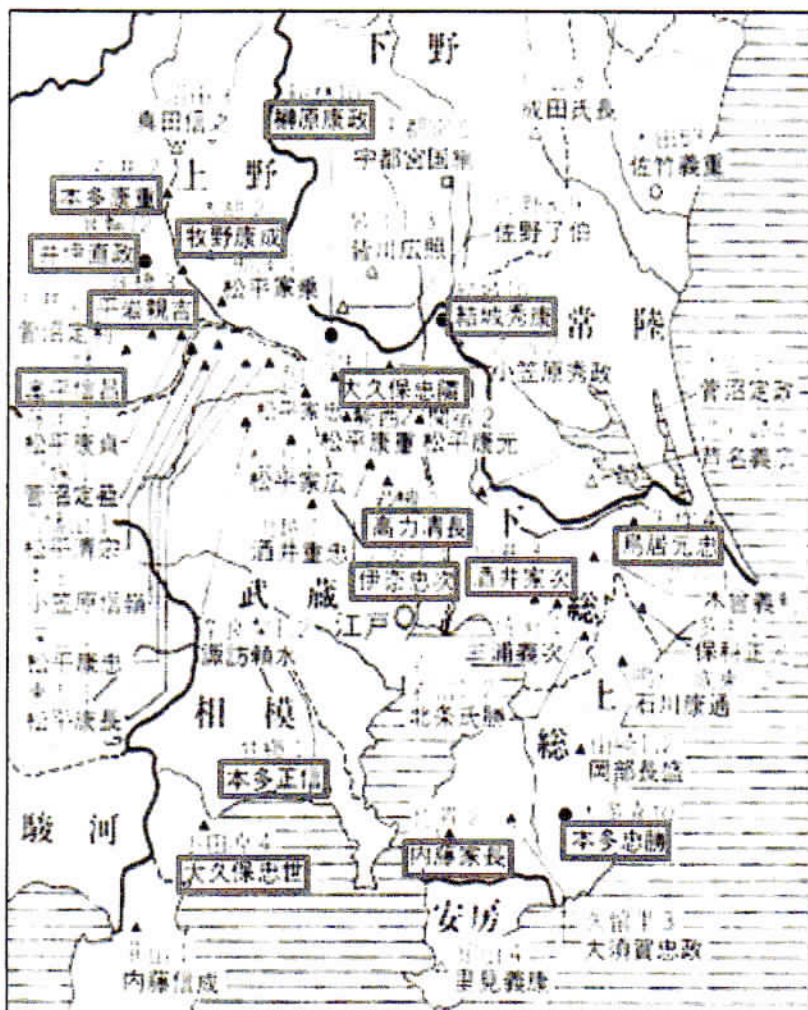
武将名	転封先	備考
井伊直政	上野箕輪高崎12万石	関ヶ原後彦根藩主
榊原康政	上野館林10万石	関ヶ原後もそのまま
本多忠勝	下総大多喜10万石	関ヶ原後伊勢桑名藩主
大久保忠世	相模小田原4万石	忠隣の時改易、孫忠職で復帰
鳥居元忠	下総矢作4万石	子の忠政が陸奥磐城平藩主
平岩親吉	上野厩橋3万石	甲府6万3千石、後 犬山12万3千石
酒井家次	上野白井3万石	後、高崎5万石、後に越後高田10万石、鶴岡15万石
大須賀忠政	上総久留里3万石	関ヶ原後 遠江横須賀6万石
奥平信昌	上野小幡2万石	関ヶ原後 美濃加納10万石
石川康通	上総鳴渡2万石	家成長男。後に大垣5万石
本多康重	上野白井2万石	後に岡崎5万石初代藩主
牧野康成	上野大胡2万石	子の忠成の時越後長岡藩主
菅沼定利	上野吉井2万石	田峯菅沼の血統
松平康元	下総関宿2万石	家康の異父弟、久松家
内藤家長	上総佐貫2万石	伏見城の戦いで死去
高力清長	武蔵岩槻2万石	孫が初代島原藩主、後旗本



甲府城跡(甲府市)



横須賀城跡(掛川市)



高田城三重櫓(上越市)



美濃加納城跡(岐阜市)

5 江戸泰平社会の基盤を創った三河武士たちの子孫

(1) 伊奈忠次の治水、新田開発事業

- ・三河国幡豆郡小島城（西尾市小島町）出身の三河武士。
- ・五カ国統治時代には奉行衆となり、総検地を進める責任者として活躍。
- ・関東移封に伴い、武蔵国足立郡小室（埼玉県北足立郡伊奈町小室）及び鴻巣に1万石を与えられ大名となる。また、関東の代官頭として大久保長安や彦坂元正らと共に各地の検地、新田開発、河川改修を実行する。特に、利根川や荒川の流路を変える付替（つけか）え工事や検地による家臣たちの知行割など、家康公の関東支配を強力に押し進めた。このことは後に江戸幕府が開かれた際の、財政的な基盤の確立に大きな影響を与えた。
- ・例えば、埼玉県北部を流れる利根川からおおよそ20 kmに及ぶ用水路を掘削、現在の深谷市や熊谷市の農業を潤すことになった用水路を、忠次の官職名である備前守から親しみを込めて「備前渠(きよ)」とか「備前堀」と呼んでいる。
- ・茨城県水戸市にも「備前堀」という用水路がある。この堀も忠次によって掘削された灌漑用水であり、桜川流域の治水と利水を兼ねたもの。その功績を称え、備前堀の道明橋のもとに忠次の銅像が建立されている。



(2) 江戸町奉行大岡忠相

- ・8代将軍吉宗により進められた享保の改革の際に、江戸町奉行として、主に都市政策に携わる。
- ・この大岡氏の先祖について、「大岡氏系譜」によれば、東三河の新城市大岡に居住したことから大岡姓を名乗るようになり。後に安城市の大岡白山神社の神職となって、家康公の父・広忠の時代に松平氏に仕えたと記される。忠相の忠の諱(いみな)は広忠に由来し、大岡氏代々の通字となっている。
- ・後に旗本から一万石の大名となり、三河国西大平藩主になった。
- ・大岡忠相の活躍は江戸町奉行としての「大岡裁き」で有名だが、これは「大岡政談」という創作物に由来し現実にあったことではない。
- ・忠相は吉宗に抜擢され、江戸の都市政策や司法に携わり、町奉行として「目安箱」の取り扱いを始め、裁判の判例を整理、合理的な裁判を行っていた。後に「公事方御定書」（役人の行動規範や裁判の判例）の編纂に携わる。
- ・市政においては、度々大火に見舞われてきた木造家屋過密地域の防火体制を強化するため、享保3年（1718年）には町火消組合を創設、2年後には「いろは四十七組（後に四十八組）」の町火消組織を再編成した。これは現代の地域消防団に繋がるもの。
- ・貧病人のために小石川薬園内に小石川養生所が設置した。

大岡忠相の残した業績は大きく、江戸泰平社会の土台をしっかりと再構築したのです。



大岡忠相（「大岡政談」挿絵）